



平成28年12月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕(連結)

平成28年11月10日

上場取引所 東

上場会社名 アプリックスIPホールディングス株式会社
 コード番号 3727 URL <http://www.aplix-ip.com/>
 代表者 (役職名) 代表取締役 兼 取締役社長
 問合せ先責任者 (役職名) 取締役
 四半期報告書提出予定日 平成28年11月11日
 配当支払開始予定日 —
 四半期決算補足説明資料作成の有無 : 有
 四半期決算説明会開催の有無 : 無

(氏名) 郡山 龍
 (氏名) 長橋 賢吾

TEL 050-3786-1715

(百万円未満切捨て)

1. 平成28年12月期第3四半期の連結業績(平成28年1月1日～平成28年9月30日)

(1) 連結経営成績(累計)

(%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
28年12月期第3四半期	1,138	9.2	△793	—	△809	—	△843	—
27年12月期第3四半期	1,042	△41.1	△2,038	—	△2,030	—	△2,584	—

(注) 包括利益 28年12月期第3四半期 △877百万円 (—%) 27年12月期第3四半期 △2,605百万円 (—%)

	1株当たり四半期純利益	潜在株式調整後1株当たり四半期純利益
	円銭	円銭
28年12月期第3四半期	△61.64	—
27年12月期第3四半期	△203.86	—

(2) 連結財政状態

	総資産		純資産		自己資本比率
	百万円	%	百万円	%	%
28年12月期第3四半期	2,522	—	1,858	—	73.5
27年12月期	2,740	—	1,802	—	65.6

(参考) 自己資本 28年12月期第3四半期 1,854百万円 27年12月期 1,799百万円

2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円銭	円銭	円銭	円銭	円銭
27年12月期	—	0.00	—	0.00	0.00
28年12月期	—	0.00	—	—	—
28年12月期(予想)	—	—	—	0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

3. 平成28年12月期の連結業績予想(平成28年1月1日～平成28年12月31日)

(%表示は、対前期増減率)

	売上高		営業利益	
	百万円	%	百万円	%
通期	1,650	7.7	△998	—

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無 : 無

IoT(Internet of Things)関連事業の海外における売上高の増加が見込まれる中、為替差損益を合理的に予測することは容易ではない等の理由により、平成28年12月期の経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益につきましては開示を控えさせていただきます。

※ 注記事項

- (1) 当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動(連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動) : 無
新規 一社 (社名) 、 除外 一社 (社名)
- (2) 四半期連結財務諸表の作成に特有の会計処理の適用 : 無
- (3) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示
- ① 会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 有
 - ② ①以外の会計方針の変更 : 無
 - ③ 会計上の見積りの変更 : 無
 - ④ 修正再表示 : 無

(4) 発行済株式数(普通株式)

① 期末発行済株式数(自己株式を含む)	28年12月期3Q	14,353,930 株	27年12月期	12,753,930 株
② 期末自己株式数	28年12月期3Q	16,077 株	27年12月期	15,978 株
③ 期中平均株式数(四半期累計)	28年12月期3Q	13,691,863 株	27年12月期3Q	12,678,630 株

※四半期レビュー手続の実施状況に関する表示

この四半期決算短信は、金融商品取引法に基づく四半期レビュー手続の対象外であり、この四半期決算短信の開示時点において、金融商品取引法に基づく四半期財務諸表のレビュー手続は終了していません。

※業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

(将来に関する記述等についてのご注意)

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。業績予想の前提となる条件及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等につきましては、添付資料「1. 当四半期決算に関する定性的情報 (3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	3
(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明	3
2. サマリー情報(注記事項)に関する事項	4
(1) 当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動	4
(2) 四半期連結財務諸表の作成に特有の会計処理の適用	4
(3) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示	4
3. 継続企業の前提に関する重要事象等	5
4. 四半期連結財務諸表	6
(1) 四半期連結貸借対照表	6
(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書	8
(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項	10
(継続企業の前提に関する注記)	10
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)	11

1. 当四半期決算に関する定性的情報

(1) 経営成績に関する説明

現在当社グループは、総合エンターテインメント関連事業や従来のソフトウェア基盤技術を中心とした事業を縮小し、IoT関連事業を中心とする事業構造への転換を行っております。当該事業構造への転換が、より安定的に収益を伸ばせる体質への改革につながり、ひいては株主価値の向上につながると考えております。

なお、当社グループで推進しております事業の再編成等に伴い、第1四半期連結会計期間より従来の報告セグメントの名称を変更し、「出版映像等事業」を「出版事業」としております。本セグメント名称の変更がセグメント情報に与える影響はありません。また、もう1つの報告セグメントである「テクノロジー事業」の名称には変更ありません。

(a) テクノロジー事業

当社がテクノロジー事業において注力する分野であるIoT (Internet of Things) は、あらゆるモノに通信機能を持たせて、インターネットに接続する技術であり、平成26年時点における全世界でのIoT市場規模約6,500億米ドルが、平成32年にかけて1.7兆米ドルまで拡大する可能性があるとして予想されています(典拠: Explosive Internet of Things Spending to Reach \$1.7 Trillion in 2020, According to IDC, 02 Jun 2015)。こうしたIoT市場の拡大は、情報の収集・蓄積、解析、反映・応用のあらゆる面において革新をもたらすことから、ビジネスや産業構造そのものを大きく変革する可能性を秘めていると、総務省「平成27年度版 情報通信白書」では述べられています。

当社では、こうした拡大するIoT市場において多くの製品・ソリューションを先駆けて提供してまいりました。

平成25年11月にIoT化に必要となるモジュール(以下「IoTモジュール」)の提供を開始し、その後、スマートフォン向けアプリケーション及びクラウドを提供する等、一貫したIoT化に関する設計・開発・サポート等を提供してきたことにより、家電製品等のIoT化について多くの経験・ノウハウを蓄積するに至りました。こうした取り組みにより、自社製品のIoT化を検討する日本、中国及び欧米のメーカー等において、当社のIoTソリューションの導入が増加しています。

当第3四半期連結累計期間におきましては、株式会社ブラザーエンタープライズのスマートフォン対応IoT LEDライト「MAmoriait (マモリアアイティー)」に、当社のIoTソリューションが搭載されることを9月に発表いたしました。「MAmoriait」では、従来の「MAmoria (マモリア)」シリーズと同様に、地震等の揺れを感じたときに自動的に点灯する機能に加えて、当社のIoTソリューションを搭載することで、緊急速報メールに連動してライトを点灯したり、ブザーを鳴らしたりする機能、天気情報に連動して、毎朝決まった時間にライトの色の变化やフラッシュによって今日の天気をお知らせする機能、「MAmoriait」にスマートフォンをかざすと、天気情報をスマートフォンに表示する機能や電池残量が少なくなったことをスマートフォンへ通知する機能等の提供が可能となりました。

また同月には、ヨーロッパ大手の浄水器メーカーであるBWT AG (以下「BWT社」との間で、当社がBWT社に対して流量センサーとIoTモジュールを組み合わせた浄水器及びアプリケーション等の試作品を提供し、浄水器のIoT化検討を支援する流量計試作契約を締結したことを発表いたしました。当社では、浄水器をIoT化することにより、品質維持に欠かせないフィルター交換を利用者に任せる定期的な交換モデルから、フィルター交換の適切なタイミングを通知することで利用者が安心して綺麗な水を飲める環境を実現したり、修理等のメンテナンス依頼よりも先にメーカー側のサービス部門が状況を把握し、よりきめ細やかなサービスの提供を可能としたりする等、利用者と浄水器メーカー双方にとって有益なソリューションを提供してまいります。

更に平成28年10月に、ネスレ日本株式会社のコーヒーマシン「ネスカフェ ゴールドブレンド パリスタ i [アイ]」向けのスマートフォンアプリケーションとクラウドシステムを開発したことを発表いたしました。当該開発に係る売上は、当第3四半期連結会計期間に計上しております。

当社では、今後も顧客に対するIoTサービスの提供を継続的に行うとともに、多様化する顧客のニーズに合わせたアプリケーションの開発・提供にも力を入れ、IoT市場における当社の優位性の確立に努めてまいります。

(b) 出版事業

コミック作品につきましては、当第3四半期連結累計期間に新刊28点を刊行し、増刷を34回実施いたしました。

男性向けでは、累計35万部を突破した学園ラブコメディ「お前ら全員めんどくさい!」、及びアニメ化もされシリーズ累計340万部突破の大ヒットとなったロボットコミック作品「ブレイクブレイド」最新刊の出荷が好調でした。

女性向けでは、20～30代女性読者向けのハートフルなコメディタイトル「同居人はひざ、時々、頭のうえ。」の最新刊である第2巻を刊行し、同作品は累計30万部を突破しました。また、同じく女性向けの「SSB 一超青春姉弟s—」、及び「新戸ちゃんとお兄ちゃん」のシリーズ各巻が増刷を重ねる等、男女両読者向けの多彩なラインナップによって出荷が好調に推移しています。

絵本・児童書部門につきましては、当第3四半期連結累計期間に新刊33点を刊行し、増刷を136回実施いたしました。平成26年12月期の「ミルクこぼしちゃだめよ!」、平成27年12月期の「クレヨンからのおねがい!」に続き、全国学校図書館協議会・毎日新聞社主催の「青少年読書感想文全国コンクール」の平成28年の課題図書に選定された翻訳小説「Wonder ワンダー」の出荷が順調に推移し、売上に貢献しました。

また平成28年7月には日本初のクイズカルチャー誌「QUIZ JAPAN (クイズジャパン)」のvol.6、人気声優のテレビ番組の放送10周年を記念した「櫻井孝宏の(笑)メモリアルブック～HAPPY 10TH ANNIVERSARY～」を刊行する等、絵本・児童書以外の新しい分野の開拓も続けております。

これらの結果、当第3四半期連結累計期間のテクノロジー事業の売上高は367,454千円(前第3四半期連結累計期間の売上高210,858千円)、出版事業の売上高は770,985千円(前第3四半期連結累計期間の売上高831,908千円)となりました。

営業損益につきましては、テクノロジー事業の営業損失は443,410千円(前第3四半期連結累計期間の営業損失1,185,258千円)、出版事業の営業利益は40,127千円(前第3四半期連結累計期間の営業損失107,957千円)となりました。

また、当第3四半期連結累計期間においてセグメント損失の調整額が390,158千円(前第3四半期連結累計期間のセグメント損失の調整額745,381千円)が発生しております。セグメント損失は、四半期連結損益計算書の営業損失と調整を行っております。

以上の結果、当第3四半期連結累計期間の業績につきましては、売上高は1,138,439千円(前第3四半期連結累計期間の売上高1,042,767千円)となりました。

営業損益につきましては、793,441千円の営業損失(前第3四半期連結累計期間の営業損失2,038,597千円)となりました。

経常損益につきましては、809,557千円の経常損失(前第3四半期連結累計期間の経常損失2,030,420千円)となりました。

親会社株主に帰属する四半期純損益につきましては、843,938千円の親会社株主に帰属する四半期純損失(前第3四半期連結累計期間の親会社株主に帰属する四半期純損失2,584,721千円)となりました。

(2) 財政状態に関する説明

当社グループの当第3四半期連結会計期間末における総資産につきましては、前連結会計年度末と比較して218,037千円減少し2,522,642千円となりました。これは、主に受取手形及び売掛金が180,612千円減少したこと等によるものです。

負債につきましては、前連結会計年度末と比較して274,464千円減少し663,954千円となりました。これは、主に支払手形及び買掛金が21,750千円、未払金が31,546千円、前受金が101,775千円、借入金が39,900千円それぞれ減少したこと等によるものです。

純資産につきましては、前連結会計年度末と比較して56,426千円増加し1,858,687千円となりました。これは、親会社株主に帰属する四半期純損失を843,938千円計上したことに伴い利益剰余金が減少した一方、新株予約権の発行とその行使による新株の発行に伴い、資本金が466,407千円、資本剰余金が466,407千円それぞれ増加したこと等によるものです。

以上の結果、当第3四半期連結会計期間末における自己資本比率につきましては、前連結会計年度末と比較して7.9ポイント増加し、73.5%となりました。

(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明

連結業績予想につきましては、平成28年8月10日付「平成28年12月期通期連結業績予想の修正に関するお知らせ」において公表いたしました数値から変更ありません。

2. サマリー情報(注記事項)に関する事項

(1) 当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動

該当事項はありません。

(2) 四半期連結財務諸表の作成に特有の会計処理の適用

該当事項はありません。

(3) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示

(企業結合に関する会計基準等の適用)

「企業結合に関する会計基準」(企業会計基準第21号 平成25年9月13日)、「連結財務諸表に関する会計基準」(企業会計基準第22号 平成25年9月13日)及び「事業分離等に関する会計基準」(企業会計基準第7号 平成25年9月13日)等を第1四半期連結会計期間から適用し、四半期純損失等の表示の変更を行っております。当該表示の変更を反映させるため、前第3四半期連結累計期間及び前連結会計年度については、四半期連結財務諸表及び連結財務諸表の組替えを行っております。

3. 継続企業の前提に関する重要事象等

当社グループは、平成24年12月期から平成26年12月期まで、総合エンターテインメント事業やソフトウェア基盤技術を中心とした事業から、テクノロジー事業への転換を行ってまいりました。平成25年12月期から総合エンターテインメント事業の撤退を開始し、平成26年12月期はゲームやアニメーションの事業を売却、平成27年12月期は旧来のソフトウェア基盤技術事業を終了したため、4期連続となる売上高の著しい減少、営業損失の計上及び営業キャッシュ・フローのマイナスが継続しております。当第3四半期連結累計期間においては、前第3四半期連結累計期間と比較して、売上高は9.2%増加し、また営業損益、経常損益及び親会社株主に帰属する四半期純損益における損失計上額についても縮小したものの、793,441千円の営業損失、809,557千円の経常損失、843,938千円の親会社株主に帰属する四半期純損失を計上したことから、依然として継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しているものと認識しております。

当社グループは、こうした状況を解消するため、以下の施策を実施し、当該状況の解消又は改善に努めております。

テクノロジー事業においては、通信モジュールからスマートフォン用のアプリケーション、クラウドまでIoT製品化に必要なトータルソリューションを提供し、顧客のIoT化ニーズの実現と今後の更なる受注拡大を目指します。また、IoT製品化に伴う設計・試作から検査までを含めた技術的な支援等を提供し、IoT製品化に要する期間の短縮とIoT関連の製造分野における当社の優位性確立に努めてまいります。

出版事業においては、新刊1点当たりの発行部数及び増刷の増加や固定費の削減、業務プロセスの改善による効率化等を今後も継続的に実施し、より多くの読者に支持いただけるような作品作りに努めております。事業の収益管理の強化や事業運営の効率化等を図るため、平成28年1月、当社の出版事業を分割し、アプリックス I Pパブリッシング株式会社を設立いたしました。また現在当社では、非中核事業である出版事業の切り離しの検討を進めており、その一環として平成28年9月23日開催の取締役会の決議に基づき、当社子会社であるアプリックス I Pパブリッシング株式会社、フレックスコミックス株式会社及び株式会社ほるぷ出版の3社が実施する共同株式移転により、平成28年10月3日に中間持株会社としてアプリックス出版ホールディングス株式会社を設立いたしました。当該設立によって、出版事業内の連携をより密にし経営効率の向上と収益力の強化を図るほか、中核事業であるIoTソリューション事業との境界も明確になり、速やかな事業再編を行うことが可能となると考えております。

コスト削減については、平成27年12月期までに実施した総合エンターテインメント事業からの撤退及び旧来のソフトウェア基盤技術事業の終了により、過去の事業にかかるコスト削減は完了したと考えておりますが、当社の成長軌道への回帰を早期に実現するため、人件費の圧縮や人員削減、業務の効率化等による継続的なコスト削減等を実施し、更なる体質強化と収益性の改善に努めてまいります。なお、平成28年9月30日開催の取締役会決議により、海外顧客向け営業活動に注力するため、国内の新規顧客を開拓する営業活動を行っていた国内営業部門を廃止すること、また、当社単独で製品やソリューションの開発を進めるより、それぞれの業界で実績のある顧客の製造ノウハウや各種業界のノウハウ等を活用することで、納期の短縮や更なる競争力のあるサービスの提供が早期に実現でき、その結果、今まで以上に収益の拡大に供することができると判断したことから、製造・企画部門の廃止を決定いたしました。これにより平成29年12月期以降、固定費等の削減効果が見込めると考えております。

財務面においては、事業構造の転換や収益性の高い新たなビジネスモデルを遂行するために、平成27年3月9日開催の取締役会において、ドイツ銀行ロンドン支店を割当先とする第三者割当によるアプリックス I Pホールディングス株式会社第D-1回乃至第D-3回新株予約権を決議いたしました。当社では、企業価値向上による第D-1回乃至第D-3回新株予約権の行使を目指してまいりましたが、株式市場の低迷及び当社の業績回復に時間を要したこと等から、当社の株価が新株予約権行使価額に到達せず未だ行使されておられません。

また、今後の拡大が予想されるIoT市場において、顧客からの受注を積極的に拡大するため、平成28年2月12日開催の取締役会において、マッコーリー・バンク・リミテッドに対する第M-1回新株予約権（第三者割当）の発行を決議いたしました。第M-1回新株予約権は平成28年6月20日に行使完了し、924,174千円（発行に際して払い込まれた金額の総額8,640千円を合算した金額は、932,814千円）を調達いたしました。しかしながら、これらの対応策を実行していくものの、第4四半期以降の事業計画については今後の経済環境の変化による影響を受ける等により、計画どおりに推移しない可能性があり、この場合当社の資金繰りに影響を及ぼす可能性があります。したがって現時点においては、継続企業の前提に関する重要な不確実性が存在するものと認識しております。

なお、四半期連結財務諸表は継続企業を前提として作成しており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響を四半期連結財務諸表に反映しておりません。

4. 四半期連結財務諸表

(1) 四半期連結貸借対照表

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成27年12月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成28年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,438,235	1,377,350
受取手形及び売掛金	628,886	448,274
商品及び製品	424,414	489,818
仕掛品	29,365	40,235
その他	160,440	119,198
貸倒引当金	△6,335	△5,484
流動資産合計	2,675,008	2,469,392
固定資産		
投資その他の資産		
投資有価証券	16,053	9,464
破産更生債権等	821,882	822,857
その他	45,814	43,785
貸倒引当金	△818,078	△822,857
投資その他の資産合計	65,671	53,249
固定資産合計	65,671	53,249
資産合計	2,740,680	2,522,642

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成27年12月31日)	当第3四半期連結会計期間 (平成28年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	132,148	110,398
短期借入金	100,000	100,000
1年内返済予定の長期借入金	47,880	31,600
未払金	173,893	142,347
未払法人税等	41,816	18,640
前受金	135,472	33,696
賞与引当金	22,554	40,107
返品調整引当金	53,525	43,645
その他	136,046	73,386
流動負債合計	843,337	593,821
固定負債		
長期借入金	48,970	25,350
退職給付に係る負債	26,378	28,519
その他	19,733	16,263
固定負債合計	95,081	70,133
負債合計	938,419	663,954
純資産の部		
株主資本		
資本金	13,416,200	13,882,607
資本剰余金	151,500	617,907
利益剰余金	△11,780,223	△12,623,800
自己株式	△25,458	△25,549
株主資本合計	1,762,018	1,851,164
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,047	665
為替換算調整勘定	35,039	2,576
その他の包括利益累計額合計	37,087	3,242
新株予約権	3,155	4,280
純資産合計	1,802,260	1,858,687
負債純資産合計	2,740,680	2,522,642

(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書

四半期連結損益計算書

第3四半期連結累計期間

(単位：千円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成27年1月1日 至平成27年9月30日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成28年1月1日 至平成28年9月30日)
売上高	1,042,767	1,138,439
売上原価	1,407,624	1,016,944
売上総利益又は売上総損失(△)	△364,857	121,495
販売費及び一般管理費	1,673,740	914,936
営業損失(△)	△2,038,597	△793,441
営業外収益		
受取利息	5,490	324
為替差益	6,232	—
投資事業組合運用益	5,338	3,193
その他	3,665	1,222
営業外収益合計	20,726	4,740
営業外費用		
支払利息	2,850	2,124
株式交付費	2,320	4,088
為替差損	—	12,966
支払手数料	5,249	1,500
その他	2,128	176
営業外費用合計	12,549	20,855
経常損失(△)	△2,030,420	△809,557
特別利益		
新株予約権戻入益	223	—
その他	5	—
特別利益合計	229	—
特別損失		
固定資産売却損	420	—
減損損失	481,050	—
固定資産除却損	7,297	—
投資有価証券売却損	756	—
特別退職金	—	18,040
本社移転費用	—	8,077
リース解約損	277	—
特別損失合計	489,802	26,118
税金等調整前四半期純損失(△)	△2,519,993	△835,675
法人税、住民税及び事業税	50,571	10,423
法人税等調整額	14,156	△2,161
法人税等合計	64,727	8,262
四半期純損失(△)	△2,584,721	△843,938
親会社株主に帰属する四半期純損失(△)	△2,584,721	△843,938

四半期連結包括利益計算書
第3四半期連結累計期間

(単位：千円)

	前第3四半期連結累計期間 (自平成27年1月1日 至平成27年9月30日)	当第3四半期連結累計期間 (自平成28年1月1日 至平成28年9月30日)
四半期純損失(△)	△2,584,721	△843,938
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△5,218	△1,381
為替換算調整勘定	△15,442	△32,455
その他の包括利益合計	△20,661	△33,837
四半期包括利益	△2,605,382	△877,775
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	△2,605,382	△877,775

(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

当社グループは、平成24年12月期から平成26年12月期まで、総合エンターテインメント事業やソフトウェア基盤技術を中心とした事業から、テクノロジー事業への転換を行ってまいりました。平成25年12月期から総合エンターテインメント事業の撤退を開始し、平成26年12月期はゲームやアニメーションの事業を売却、平成27年12月期は旧来のソフトウェア基盤技術事業を終了したため、4期連続となる売上高の著しい減少、営業損失の計上及び営業キャッシュ・フローのマイナスが継続しております。当第3四半期連結累計期間においては、前第3四半期連結累計期間と比較して、売上高は9.2%増加し、また営業損益、経常損益及び親会社株主に帰属する四半期純損益における損失計上額についても縮小したものの、793,441千円の営業損失、809,557千円の経常損失、843,938千円の親会社株主に帰属する四半期純損失を計上したことから、依然として継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しているものと認識しております。

当社グループは、こうした状況を解消するため、以下の施策を実施し、当該状況の解消又は改善に努めております。

テクノロジー事業においては、通信モジュールからスマートフォン用のアプリケーション、クラウドまでIoT製品化に必要なトータルソリューションを提供し、顧客のIoT化ニーズの実現と今後の更なる受注拡大を目指します。また、IoT製品化に伴う設計・試作から検査までを含めた技術的な支援等を提供し、IoT製品化に要する期間の短縮とIoT関連の製造分野における当社の優位性確立に努めてまいります。

出版事業においては、新刊1点当たりの発行部数及び増刷の増加や固定費の削減、業務プロセスの改善による効率化等を今後も継続的に実施し、より多くの読者に支持いただけるような作品作りに努めております。事業の収益管理の強化や事業運営の効率化等を図るため、平成28年1月、当社の出版事業を分割し、アプリックスIPパブリッシング株式会社を設立いたしました。また現在当社では、非中核事業である出版事業の切り離しの検討を進めており、その一環として平成28年9月23日開催の取締役会の決議に基づき、当社子会社であるアプリックスIPパブリッシング株式会社、フレックスコミックス株式会社及び株式会社ほるぷ出版の3社が実施する共同株式移転により、平成28年10月3日に中間持株会社としてアプリックス出版ホールディングス株式会社を設立いたしました。当該設立によって、出版事業内の連携をより密にし経営効率の向上と収益力の強化を図るほか、中核事業であるIoTソリューション事業との境界も明確になり、速やかな事業再編を行うことが可能となると考えております。

コスト削減については、平成27年12月期までに実施した総合エンターテインメント事業からの撤退及び旧来のソフトウェア基盤技術事業の終了により、過去の事業にかかるコスト削減は完了したと考えておりますが、当社の成長軌道への回帰を早期に実現するため、人件費の圧縮や人員削減、業務の効率化等による継続的なコスト削減等を実施し、更なる体質強化と収益性の改善に努めてまいります。なお、平成28年9月30日開催の取締役会決議により、海外顧客向け営業活動に注力するため、国内の新規顧客を開拓する営業活動を行っていた国内営業部門を廃止すること、また、当社単独で製品やソリューションの開発を進めるより、それぞれの業界で実績のある顧客の製造ノウハウや各種業界のノウハウ等を活用することで、納期の短縮や更なる競争力のあるサービスの提供が早期に実現でき、その結果、今まで以上に収益の拡大に供することができると判断したことから、製造・企画部門の廃止を決定いたしました。これにより平成29年12月期以降、固定費等の削減効果が見込めると考えております。

財務面においては、事業構造の転換や収益性の高い新たなビジネスモデルを遂行するために、平成27年3月9日開催の取締役会において、ドイツ銀行ロンドン支店を割当先とする第三者割当によるアプリックスIPホールディングス株式会社第D-1回乃至第D-3回新株予約権を決議いたしました。当社では、企業価値向上による第D-1回乃至第D-3回新株予約権の行使を目指してまいりましたが、株式市場の低迷及び当社の業績回復に時間を要したこと等から、当社の株価が新株予約権行使価額に到達せず未だ行使されておられません。

また、今後の拡大が予想されるIoT市場において、顧客からの受注を積極的に拡大するため、平成28年2月12日開催の取締役会において、マッコーリー・バンク・リミテッドに対する第M-1回新株予約権（第三者割当）の発行を決議いたしました。第M-1回新株予約権は平成28年6月20日に行使完了し、924,174千円（発行に際して払い込まれた金額の総額8,640千円を合算した金額は、932,814千円）を調達いたしました。しかしながら、これらの対応策を実行していくものの、第4四半期以降の事業計画については今後の経済環境の変化による影響を受ける等により、計画どおりに推移しない可能性があり、この場合当社の資金繰りに影響を及ぼす可能性があります。したがって現時点においては、継続企業の前提に関する重要な不確実性が存在するものと認識しております。

なお、四半期連結財務諸表は継続企業を前提として作成しており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響を四半期連結財務諸表に反映しておりません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)

当社は、平成28年2月29日付で発行した第M-1回新株予約権の行使に伴う新株の発行による払込みを受けております。この結果、当第3四半期連結累計期間において資本金が466,407千円、資本準備金が466,407千円増加し、当第3四半期連結会計期間末において資本金が13,882,607千円、資本準備金が617,907千円となっております。